

## 創造力の育成をめざした音楽科授業 (2)

### － 詩の朗読に合う BGM の創作 －

増 井 知世子

知識基盤社会における芸術科の大きな役割の1つに、創造力の育成が挙げられる。本校芸術科では一昨年度より3年間、「創造力の育成をめざした芸術科教育」というテーマのもとに授業研究を行ってきた。研究の第1年次において、音楽科では、「コンピュータによる音楽創作－音楽様式の学習をふまえて－」という単元の授業(高Ⅱ)を行い、その実践報告を2013年度の本研究紀要にまとめた。第2年次では「詩の朗読に合う BGM の創作」という単元の授業(高Ⅱ)を行った。今年度の第3年次では第2年次の授業を改善して、同単元の授業(高Ⅰ)を行った。本稿は第3年次の実践報告とまとめである。

昨年度の実践から改善した点は、授業計画全般にわたってアクティブラーニングを取り入れたことである。楽曲の聴取から作品の相互評価に至るまで、グループからクラス全体へと、意見交流と共有を繰り返すことにより、学びをより深めることを意図した。

本校芸術科では、創造力育成に向けての学習を、次の3段階で考えている。すなわち、(1)知識・技能の獲得、(2)思考力・判断力の育成、(3)表現力・創造力の育成である。この3つの学習段階に基づいて、授業計画を考えた。授業計画の前半では(1)(2)に基づき、創作の導入としての楽曲鑑賞(聴取)を行った。後半では(2)(3)に基づき、創作を行った。

生徒の取り組みの過程や作品、およびワークシートの分析から、創造力育成の一端を確認することができた。

### I はじめに

本単元の授業を構想した根拠は、知識基盤社会において芸術科が担うべき役割として創造力の育成が挙げられていることにある。21世紀の知識基盤社会においては、新しい知識や技術を継続的に学び、活用し、自分のものとしていく力が必要とされる。そのなかで重点がおかれるようになってきた高次のスキルの一つとして、創造的に取り組む力があげられている<sup>1)</sup>。

本校芸術科では、創造力育成に向けた学習を、以下のように段階的にとらえている<sup>2)</sup>。

- (1) 基礎的・基本的な〈知識〉あるいは〈技能〉を習得させ、
- (2) これらを統合したり選択したりして活用を試みる〈思考力〉あるいは課題を解決する〈判断力〉により、
- (3) 場に応じて自分の思いを形にする〈表現力〉や、新たなものを生み出し他者に発信していく〈創造力〉を育成する。

筆者は、創造力育成のための(1)～(3)の学習段階

に沿って、「詩の朗読に合う BGM の創作」という単元の授業を、昨年度と今年度を実施した。指導計画と(1)～(3)の段階との対応については後述する。

また、本単元の授業は、高等学校学習指導要領における創作の指導事項も踏まえている。高等学校学習指導要領 芸術(平成21年)「音楽Ⅰ」2内容A表現(3)創作の指導事項イに「音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの構成を工夫して、イメージをもって音楽をつくること。」と示されている<sup>3)</sup>。

筆者は、イメージをもって表現するためのよりどころを詩人による詩に求め、詩の朗読に合う BGM を創作する授業を構想した。この発想の契機は、詩人の谷川俊太郎氏が「パフォーマンスとしての詩の朗読」をご子息の谷川賢作氏とともにされていることと、「詩はうたに恋している、ことばは音楽に恋している」という谷川氏のフレーズ<sup>4)</sup>に共感し力を得たことにある。

## II 授業計画と教材

単元：詩の朗読に合うBGMを創作しよう

学年・組：高I音楽選択クラス・A組42名（男子23名，女子19名）

学習目標：

1. 詩の朗読に合うBGMの創作に関心をもち，主体的にかつ協力して学習に取り組む。
2. 鑑賞で学習したことを生かして，イメージをもち，創作表現を工夫する。
3. 詩の内容やイメージを音楽で効果的に表現する技能を身につける。

教材：

<BGM創作の題材とした詩>

- ① 「生まれめんなかな」（栗原貞子）<sup>5)</sup>
- ② 「四月の雨」（小池昌代）<sup>6)</sup>
- ③ 「歌」（新川和江）<sup>7)</sup>
- ④ 「二つの草」（金子みすゞ）<sup>8)</sup>
- ⑤ 「朝のリレー」（谷川俊太郎）
- ⑥ 「泣いているきみ」（同）
- ⑦ 「こころこころ」（同）<sup>9)</sup>

<創作活動の導入としての楽曲>

- ・ <水の戯れ>（ラヴェル作曲）
- ・ 組曲<展覧会の絵>より“リモージュの市場”（ムソルグスキー作曲，ラヴェル編曲）
- ・ <イオニザシオン>（ヴァレーズ作曲）
- ・ <ワルソーの生き残り>（シェーンベルク作曲）

<詩の朗読に音楽をつけたものの参考>

- ・ 「昔はどこへ」（谷川俊太郎による自作の詩の朗読。チャールズ・チャップリン作曲，谷川賢作編曲）

題材として生徒たちに提示した詩は，次のような視点で選んだ。「雨」や「月」など，具体的にイメージを喚起しやすいことばを含んでいること，授業者（筆者）が詩を読んだときに音楽が思い浮かぶこと，高校生の感性に合うと感じられること，短すぎたり長すぎたりしないこと，音読してリズムが面白いことなどである。昨年度の実践では，オノマトペの面白さに特徴のある詩は選択するグループがなかったため，今年度は選択肢から外した。その代わりに，金子みすゞの詩のなかから，具体的に情景をイメージしやすい詩を取り入れた。

表1は，授業計画と，上述の創造性育成のための(1)～(3)の学習段階との対応を示すものである。

## III 第1次の授業（創作活動の導入としての学習）の実際

・ 第1次第1時

授業の初めに筆者は，この取り組みの趣旨を生徒に伝えた。その要点は「芸術科ではこの3年間に〈創造力の育成〉をテーマに授業研究をしていること，詩のイメージから音楽を創造する学習を行うこと，ことばの響きやリズムを大切に，詩の朗読

表1. 授業計画（全14時間）と，創造性育成のための(1)～(3)の学習段階との対応

授業計画	ねらい	学習段階
第1次 活動の趣旨の理解と詩の熟読および導入としての楽曲鑑賞（4時間） 第1時 詩の熟読 第2時 グループ分けと詩の選定 第3時 楽曲鑑賞 第4時 役割分担決めと詩のイメージの共有	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 詩のイメージを共有する。</li> <li>・ 標題を手がかりにして，音楽の諸要素に着目して聴取する。（分析的聴取）</li> <li>・ 十二音技法について知る。（音楽的視野の拡大）</li> <li>・ 聴取した内容を，グループおよびクラス全体で共有する。（アクティブラーニング）</li> <li>・ 音楽からイメージを喚起する。</li> </ul>	(1) 知識・技能の獲得 (2) 思考力・判断力の育成
第2次 詩に音楽をつける活動（10時間） 第1～4時 創作 第5・6時 中間発表 第7・8時 作品の改善・洗練 第9・10時 本発表（第9時は2015年度の本校の教育研究大会での公開授業にあたる。）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ イメージから音楽を創造する。</li> <li>・ 創作過程における音素材の探究，分析的聴取</li> <li>・ 中間発表と本発表における作品の分析的聴取を通して，他者作品と自作品の良い点と課題を発見する。</li> <li>・ 聴取した内容を，グループおよびクラス全体で共有する。（アクティブラーニング）</li> </ul>	(2) 思考力・判断力の育成 (3) 表現力・創造力の育成

に合うBGMを創作すること、創作のヒントとして、楽曲鑑賞を通して〈音楽からイメージを喚起する〉学習を行うこと」であった。

創作のイメージをもたせるために、本校のもう一人の音楽教諭とともに「生ましめんかな」の詩の朗読とピアノの即興をしてみせた。その後、上記7つの詩を、全員で音読した。ことばの響きやリズムを感じさせるためには、黙読だけでなく音読することが重要と考えたからである。

・第1次第2時

創作のグループは、男女の人数が偏らないように配慮しながら、5～8人ずつの7グループをくじによって決めた。このグループで、詩の選定から創作までの活動を行うことを伝えた。

各グループで、リーダーと記録係を決めた。リーダーの役割は話し合いを進めることや意見発表の際に代表して発表すること、記録係の役割はグループ内で出された意見やアイデアをもれなく記録することである。取り組みのすべてを記録することの目的は、毎時間の学習の成果と課題を明らかにすることにある。

詩の選定の際、グループ内で意見を出し合っていた。7グループがそれぞれ選択した詩の内訳は、

「朝のリレー」が3グループ、「四月の雨」「歌」「二つの草」「泣いているきみ」が1グループずつであった。グループによる詩の選定後、各リーダーは、選んだ詩と、その詩を選んだ理由を発表した。例えば「四月の雨」を選んだ理由として“景色がたくさん書いてあって音で表現しやすいと思ったから”、「朝のリレー」を選んだ理由として“詩が物語仕立てになっていて、リレーで世界がつながっている様子が表現しやすいと思ったから”などの内容であった。

・第1次第3時

創作活動の導入として、「音楽からイメージを喚起する」と題して、楽曲鑑賞（聴取）を行った。前掲の〈活動の導入としての楽曲〉の4曲を標題に照らして聴き、音楽の要素（音高、リズム、ハーモニー、音色、テンポ、ダイナミクス、テクスチュアなど）のどのようなはたらきによって、楽曲がその標題にふさわしいものになっているかについて考えさせた。4曲目の〈ワルソーの生き残り〉には音色に「語りの声」、音高に「十二音技法による音の配列」が含まれる。教材にこの4曲目を加えたのは、生徒の音楽観を広げることを意図したからである。

生徒たちの、各楽曲についての記述を音楽の要素別に分類してまとめたものが表2である。記述か

表2. 生徒たちが各楽曲から聴取した、音楽の要素のはたらき

	水の戯れ	リモージュの市場	イオニザシオン	ワルソーの生き残り
音高	ピアノの高音の連続から、水の軽やかさが感じられる。/音が高くて、水がキラキラしている感じがする。/高音は水滴を、低音は波や岩を表している。	高い音は、子どもの声の感じがする。	音の高低で原子の大きさを想像する。	たまに演奏される高音が、恐怖を表している。/十二音技法により、終わることなく湧き上がる怒りが表現されている。
リズム	流れるようなリズムから、水が連想される。/細かく短い音の連なりによって、水の一粒子が表されている。	細かい音が多いので、あわただしい感じがする。	バラバラなようだけど、掛け合いのようなリズムに“イオン感”がある。	急に演奏される弦楽器のピチカートが恐怖を表している。/打楽器の刻みに、近づいてくる軍曹を想像した。/叫び方が鋭い。
ハーモニー	不協和音が、よどみを表している。	明るい市場の感じ。		ダーク。
音色	なめらかな弾き方のときは、水が流れている感じがした。	行き交う人々の流れを、弦、木管が表し、時折現れる打楽器は、人々の衝突を表している。	打楽器の多用により、にぎやかな感じがする。/変わった音の楽器によって、見たことのないような不思議な世界を想像する。	鋭い。

テンポ	音の流動性が感じられる。	速めのテンポにより、様々な人が行き交う市場を表している。		訴えかけるときはテンポがとても速くなった。
ダイナミクス	音の強弱で緩やかさと激しさを表していた。	音の激しさが人ごみを表している。	音の強弱で原子の大きさを想像する。	急に大きくなる語りの声が、いらだちを表している。
テクスチャ			急激な変化を表すような音と、徐々に変わっていく小さい持続音の両方がある、たくさんのものが混在している感じ。/主旋律があるようなないような感じが、曲の世界観を表している。	オケだけ、語りだけのところから突然鋭く入ったり、ピチカート、合唱など目まぐるしい変化があり、安らぎがない。

ら、生徒たちは楽曲をよく聴取しており、感受性が豊かであると感じる。各自でワークシートに記述したものをグループで集約した後、クラス全体で共有した。

この学習の後、〈詩の朗読に音楽をつけたものの参考〉として、谷川俊太郎氏自身による「昔はどこへ」の朗読と音楽を聴かせた。これは上述の「生まれめんな」で実演したのと同様に、生徒たちに創作のイメージをもたせることを意図したものである。

・第1次第4時

各グループで役割分担決めと詩のイメージの共有を行った。役割決めとは、朗読者と楽器分担を決めるのであるが、詩のイメージが共有できてからでないと決まらなかったようで、まずは自分たちの選んだ詩にどのような音楽をつけるかについて話し合っていた。話し合いの経過や創作のアウトラインについて記録するように、授業者は記録係に促した。記録係によって記述された創作メモは、表3として後掲する。

表3 各グループの創作メモの抜粋

班	選んだ詩	創作メモの抜粋
1	②	雨の音を表現（ピアノ、あたたか、高音でレファ#ラレ）、4/4拍子、D dur、チェロのソロから入る。ピアノ、鉄琴、ヴァイオリン、チェロで1文ずつ割り振り、つながりのあるメロディを決める。ピアノの下降：滑り落ちる雨を表現。“生きよう～届くようにと”：朗読オンリー。
2	③	第4連は思いっきり。南イタリアといえど？（オリーブ、ナポリ、パスタ、白い砂浜、青い海）ウインドチャイムでいい感じの和音を。マラカスで砂の感じを出す？
3	⑤	長調、循環型、ピアノや木琴、連符により循環を表現。場面ごとに曲調を変える。トーンチャイムでハーモニーを重ね、象徴できるものも加える。3拍子：円→永遠、4拍子：規則。
4	④	トーンチャイム、鉄琴、木琴、ヴァイオリン、トランペット。第1連：かわいらしい音、ハーモニー。第2連：下降音型、低めの音、1音ずつ切る。すれちがい→伸ばしきった音を混在、2つの旋律。第3連：メロディ明るく、ハーモニー暗め。“ちいさくさいた”から曲調を変え、音を小さくする。
5	⑥	第1連：暗、第2連：明、第3連：暗→明、第4連…明。歌にする！ギター、ピアノ、ヴァイオリン、ファゴット、コーラス？！
6	⑤	出だし静かに→第1連終了後盛り上げる→第2連前ピタッ→第3連静かに盛り上げる。
7	⑤	さわやか、ト長調→ニ長調に転調。・カムチャッカの朝：すがすがしい空気、メキシコの早朝：陽気、民族的、ニューヨークの少女：スタイリッシュな感じ、ローマの朝：神々しい朝の光、ラテン気質、暖色、オレンジ。第1連と第2連の間で中程度の盛り上がりをつける。第3連 大きく盛り上がる。金属系の音。スタイリッシュ＝ジャズ感。D dur。同じ朝でもG durの方が冷たい感じ。メロディはピアノとヴァイオリン中心。



#### Ⅳ 第2次第1時－4時(創作)の授業の実際

第2次の初めは、詩のイメージの共有と創作のアウトラインを考えることに時間を費やした。グループによってはなかなかアイデアが浮かばず難航しているところも見られたため、授業者は、楽器を正規の演奏法にこだわらず触ってみて、とにかく音を試してみるよう促した。表3は、第1次第4時から第2次第1・第2時くらいまでの創作過程における各グループの創作メモの記述を、抜粋してまとめたものである。

創作の進め方にはグループによって特徴が見られた。作品のアウトラインをきっちりと作ってから実際に音を出していくグループもあれば、アウトラインがなかなか決まらないまま、いろいろ音を試しながら創作するグループもあった。全体に、各グループのメンバーで演奏できる楽器を生かして考えていた。

創作メモから、生徒たちが詩のイメージや各連の内容の変化を吟味して、それにふさわしい音を探究している様子がわかる。「3拍子：永遠、4拍子：規則」「D dur (ニ長調)より G dur (ト長調)が同じ朝でも冷たい感じ」などのように、一定の詩の文脈内で複数の音楽の要素を比較・吟味している。これは、第1次の学習で楽曲を音楽の要素に基づいて聴取したことの効果の表れと考えられる。

5班の生徒はBGMではなく詩をそのまま歌にしたいと言ってきたので、自主性を尊重して挑戦させた。浮かんだメロディを記譜できる生徒がいなかったため、生徒が口ずさんだメロディを授業者が録音し採譜した。生徒の口ずさんだメロディは、4拍子におさまらず字余りになる箇所もあって授業者も苦労した。元のメロディができた後、生徒が楽譜制作ソフトで副旋律を創作した。

7つのグループのうち4グループが、詩の場面に応じて、部分的にはあるが楽譜を作成した。2グ

ループは、BGMの一部に既成の曲の一部を使用し、あとの1グループは打楽器中心であったため、楽譜を作成せずに、繰り返し練習するなかで作品を仕上げた。論文末の資料は、4班が作成した創作メモと楽譜の一部である。

#### Ⅴ 第2次第5時－10時(中間発表・作品の改善と洗練・本発表)の授業の実際

本項では、第2次第5・6時の中間発表と第9・10時の本発表について述べる。

中間発表では、互いに作品を発表し、相互評価を行った。「他のグループの作品の良い点と課題」を見つけ、自分たちのグループの作品の課題を考えさせた。ワークシートに各自が記入したものをグループで集約し、クラス全体で共有した。相互評価をもとに、第7・8時に、作品の改善と洗練を行った。

本発表では、互いに作品を発表し、他のグループの作品について「詩の朗読およびBGMは、詩のメッセージを伝えるのにより効果的なものであったか。(朗読の仕方、楽器選択、音の出し方、バランス、間の取り方、その他のいろいろな工夫など)」について考えさせた。中間発表時と同様に、ワークシートに各自が記入したものをグループで集約し、クラス全体で共有した。

表4は、1班、5班、6班、7班に焦点を当てて、「中間発表での相互評価」と「本発表での相互評価」の記述内容を示すものである。中間発表時と本発表時の各グループの発表は、実際、作品の内容・演奏ともにレベルが上がっていた。表4に示したワークシートの記述からも、本発表時での各グループの作品は、オリジナリティーを温存しつつ、確実に洗練されていることがわかる。これは、中間発表で他のグループの作品や相互評価から学んだことが大きいと考えられる。

表4 「中間発表での相互評価」と「本発表での相互評価」の記述内容

班	中間発表での相互評価	本発表での相互評価
1	<p>〈良い点〉あたたかい音。楽器の良さが出ていた。朗読がはっきり聞こえた。BGMの役割を果たしていた。ピチカートで雨の音を表現している。音の遠近がついている。フレーズをリレー形式にしている。始まり方が物語に入る感じ。</p> <p>〈課題〉強弱をはっきり出したらい。息が合うように。自信をもって。朗読をもう少しテンポよく。起伏。途中までだったので続きが気になる。何もなかったところがさみしい。</p>	<p>雨の音をピチカートで表現するのが良かった。情景を容易に想像できるBGMだった。朗読が2人で意外性があった。読み手のパトタッチに違和感がない。弦楽器とピアノできれいな音を出している。同じ感じのメロディを違う楽器で繰り返すのが効果的。</p>

5	<p>〈良い点〉歌を入れたところ。ハモリがある。歌声がきれい。まとまりがあった。サビのメロディすてき。〈課題〉言葉をはっきり。指揮者を見ること。指揮者しっかり。合わせる意識。BGMがでかいところがあった。</p>	<p>歌を聴いていて楽しかった。ハモリがきれいだった。2番を聴きたい！BGMとは何か？指揮者が良かった。詩を歌にする斬新なアイデアが良かった。</p>
6	<p>〈良い点〉場面転換がはっきりしている。アラム面白い。音量も良い。朗読の間の取り方。打楽器の迫力がカッコいい。〈課題〉ちょっとさみしい。種類を増やす。メロディがほしい。楽器の音を出すタイミングが合っていない。朗読が速い。朗読の声の強弱と表情があったらいい。空白の時間が長い。詩の前半と後半であまり変化がない。</p>	<p>いろんな演奏パターンがあってすごかった。楽器の演奏がシンプルだったので、詩の内容が頭に入ってきてやすかった。音の強弱がはっきりしている。ティンパニと大太鼓とベルの音が余韻を残していて、詩に深みを感じさせる。朝の“緊張感”がなんとなくわかった。いろいろな国のスケールの大きい感じが表現できていて良かった。打楽器によって生み出されるメリハリがあって良かった。伝えたい言葉に音を集めている。</p>
7	<p>〈良い点〉打楽器が詩と合っていた。静かで華やかな感じ。朗読がはっきりしていた。詩の“間”がとても詩の様子を引き立てる。連ごとに楽器を変えているので、(国を)イメージしやすい。〈課題〉物足りない。打楽器が大きく、弦が小さい。音のつながりを意識してほしい。音量バランス。メンバーのなかの演奏する分量に偏りがある。</p>	<p>音で地域を想像できた。同じ感じのメロディを楽器でリレーしているのが面白かった。朗読がしっかりしていて、間のあけ方もよく、それにBGMが加わって良かった。いろんな音を使って朝のさわやかな感じを表せていた。鉄琴が弱い。ウインドチャイムが蛇足。朗読の表情と間が、詩を引き立たせる。同じ詩でも、6班とは朗読もBGMも全く違うイメージで、やさしい感じだった。朗読の声が背景の演奏や詩の雰囲気と合った。</p>

## VI 考察とまとめ

第2次第10時に、本単元の学習を振り返ってまとめを行った。

生徒の自由記述を、内容別に以下のようにまとめた。

### 【創作活動で大事にしたこと】

- ・オリジナリティー。
- ・詩のイメージに合う音、和音、メロディを考えること。
- ・楽器の掛け合い。

### 【楽しかったこと、面白かったこと、良かったと思うこと】

- ・イメージを共有しながら話を進めていくこと。
- ・音色を重ねること。
- ・同じ詩でも全く違うBGMができていたこと。
- ・班によって個性が出ていて、聴くのが面白かった。
- ・中間発表でアドバイスをもらったこと。
- ・オリジナルのメロディを演奏したことの達成感が大きかった。
- ・協力して1つの音楽をつくることができ、良い経験になった。
- ・ただ楽譜どおり演奏ではなく作曲からしたことで総合的な力がついた。
- ・解釈と表現について、これからも曲について考え

ることが増えた。うれしい。

- ・BGMをつくるために、詩の意味をいつもより丁寧に考えることができた。

### 【むずかしかったこと】

- ・詩と音のイメージを一致させること。
- ・作曲は大変だということ。
- ・息を合わせること。

### 【発見したこと】

- ・メロディをつくるうちにだんだん表現したいものが明確になっていった。
- ・同じ詩でも楽器やメロディ、和音で印象が変わること。そのことを通して音、音楽の幅広さがわかった。
- ・音のない“間”も大切だということ。
- ・BGMの創作はむずかしいと思ったが、グループで各役割があるからできた。
- ・音楽とことばは互いに変換できるということ。
- ・楽器によって音の高低、音色に差が出て、表現したいことにぴったりの音色があること。
- ・打楽器は面白いということ。
- ・鉄琴は初めてだったが、鍵盤楽器とは違うおもしろさを感じた。
- ・詩を歌にするのも斬新であること。
- ・さまざまな楽器の音色についても、試行錯誤のなかで知ることができた。

【今後、アンサンブルをする際に活かせると考えること】

- ・呼吸を合わせること。
- ・楽器の特性を活かしたミュートの仕方。

【今後、音楽を聴くときに活かせると考えること】

- ・音楽を聴くときには全体のメロディや歌詞に意識がいきがちだが、それぞれの楽器の音にも注意して聴こうと思う。
- ・メロディと歌詞から、作詞者・作曲者が何を考え、どんな情景を表しているかにも注意したい。
- ・音が表しているものを考えたい。

本単元の取り組みを通して、生徒たちは多くのことを学んだ。協力の大切さや達成感などの、教科を超えた通教科的な成果も見られる。今回の取り組みでは偶然にも、同じ詩にBGMを創作するグループが複数あったことと、詩をそのまま歌にしたグループがあったことで、音楽を比較して聴いたり、詩を歌うことへの新しい発見も生み出すことができた。

「総合的な力がついた」「解釈と表現について考えることが増えてうれしい」といった記述にも、生徒たちの学びが深まったことを確認することができた。

今後も引き続き、生徒たちが自ら学び達成感を得ることができるような授業を考えていきたい。

## 引用・参考文献

- 1) OECD 教育研究革新センター編, 立田慶裕, 平沢安政監訳, 『学習の本質－研究の活用から実践へ－』, 明石書店, 2013, 400-401.
- 2) 『中学校・高等学校教育研究大会要項』, 広島大学附属中・高等学校中等教育研究会, 2015, 51.
- 3) 文部科学省, 『高等学校学習指導要領』, 2009, 98.
- 4) 『音楽教育実践ジャーナル』, 日本音楽教育学会, Vol.12 No.1, 2014, 6-23.
- 5) 栗原貞子, 『日本現代詩文庫17 栗原貞子詩集』, 土曜美術社, 1984.
- 6) 小池昌代, 『夜明け前十分』, 思潮社, 2001.
- 7) 新川和江, 『詩集 生きる理由』, 株式会社 花神社, 2002.
- 8) 金子みすゞ, 『みすゞ詩画集 秋』, 株式会社 春陽堂書店, 2001.
- 9) 谷川俊太郎, 『自選 谷川俊太郎詩集』, 岩波書店, 2013.

選んだ詩 4 番

【詩の内容をグループで共有し、創作のアウトラインを考える。記録係は、話し合いの詳細を、以下の余白にメモする。または、図で表しても良い。】

第一連 トンチャム、グロウグン、シロフォン、バイオリン、トランペット  
ライトチャム

- 短い音
- とがった音を使わない
- かわいらしい音
- イーモニーの和音
- やわらかい、やさしい

第二連

- 下降音形
- 低めの音
- 一音がくさる (ポーン、ポーン)
- 流れながい → のびのびした音 混在
- A×D、B×D を使う (2つの旋律)

第三連

- メロディー → 明るく
- イーモニー → 暗め (短)
- 「<sup>1</sup>あはれくさいた〜」から曲調を変えろ。  
音を小工にしろ。

第一連前  
第二連  
第三連

トンチャム  
グロウグン  
シロフォン